

生涯学習社会と京都府舞鶴市のまちづくり

The Lifelong Learning Society and Town Planning in Maizuru City, Kyoto Prefecture

水野 信太郎 菊地 達夫
Shintaro MIZUNO Tatsuo KIKUCHI

背景

20世紀の末期から世界的な試みとして生涯学習社会実現への移行が提言されてきた。この趨勢・傾向は、わが国においても同様である。学校教育の場面のみに限定されることなく、しかも就学年齢の学童に限らぬあらゆる人々が自ら能動的に学ぶことを、社会全体のシステムとして支えようという動きである。つまり生涯学習とは、学校教育と社会教育の双方を包含したより大きな概念だと言える。

したがって成人の立場からすれば、身近な大学等の人材や施設を活用した生涯学習も考えられる。また見慣れたはずの地域社会にある各種の資源・資産を再発見する行為でもある。学校教育の中では実践し難い課題の中に、生涯学習でこそ有利な対象分野が存在している。そのひとつは「まちづくり」である。まちづくり活動の場は、学校という教育施設の中だけでは納まり切れない。一方、関与する人々の年齢層も、就学年齢に止まらず広い。

以上のような視点から、京都府舞鶴市における歴史的煉瓦造建築物をいかした個性溢れるまちづくりの事例をここに報告する。

研究の目的

この研究の目的は、京都府舞鶴市の歴史的煉瓦造建築物群、文化財保護、同市における生涯学習支援の実態、大学の具体的な活動内容などを明らかにするものである。その中心となる事からは、1990年代以降の舞鶴市民による故郷まいづる再発見・再評価の小史、すなわち市民運動とりわけNPO「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」の活動、そして本年度あらたに発足した舞鶴市立赤れんが博物館「友の会」メンバーの赤れんが再認識に関するものである。生涯学習がねらいとするところには、まちづくりと共に、ひとづくりも含まれると考えるからである。

研究の方法

本研究を進めるに際しては、つぎのような2点を重要視した。まず1点目、現地を実際に見ることである。この作業により舞鶴市内に現存する歴史的煉瓦造建築物群の実態を把握する。

歴史的煉瓦造建造物群とは、明治・大正・昭和戦前に竣工した煉瓦を積み上げて構築された建築物と土木構造物を意味する。

2点目は現地踏査の際には可能な限り、市民活動の現場に参加して、視察を積み上げることであった。そのために本年度は、執筆者両名が前後して複数回の舞鶴調査を繰り返した。以上のような行為を継続・実施することによって、本研究の目的を達成しようとするものである。

先行研究

上記、研究の方法で掲げた具体的事項の結果を述べる前に、文献調査によって得ることのできた内容から整理したい。舞鶴に今なお117棟にもものぼる煉瓦造の歴史的建造物が現存することとなった最初の起因は、舞鶴湾の海岸線にあった。同地が日本海側における一大良港として発展する好条件に恵まれていたからである。

舞鶴市内東部に位置する東舞鶴港は、明治30年代に旧海軍の鎮守府ならびに海軍工廠の所在地とされた以降、軍関係の良好な煉瓦造施設が多数建設された。それ以前同地は奥行き深い湾にいだかれた静かな村に過ぎなかった。第二次世界大戦による大きな戦災を受けることもなく、さらに高度経済成長期にあっても大量に取り壊されることもなく、それらの赤煉瓦は今日を迎えている。

明治20年、政府は舞鶴を鎮守府予定地とする¹⁾。翌々年の22年に第4鎮守府（舞鶴）設置の勅令が公布された。そして実際に舞鶴鎮守府が開庁したのは同34年のことである。なお海軍工廠の前身にあたる造兵廠と造船廠の発足も同じ年であった。舞鶴海軍工廠に改称されるのは、明治36年のこと。現在この旧海軍工廠の跡地に集積する形で、煉瓦造建築物が数多く残されている。

舞鶴海軍工廠については下記に再録するような歴史的記述がある。

舞鶴海軍工廠は、海軍第二期擴張の事業として建設せられたるものにして、明治三十四年開廳せられたり。該工廠の主要目的は艦船修理にあるを以て、その設備また之に伴ひ他工廠に比して完全ならざりき。但し職工の作業維持並びに練磨の爲に三等驅逐艦「追風」、¹⁾「夕風」、²⁾「浦波」、³⁾「磯波」、⁴⁾「綾波」と、二等驅逐艦「櫻」、⁵⁾「橘」の二隻及び一等驅逐艦「海風」の一隻、合計八隻の驅逐艦を建造したり。／ 該工廠の所在地は日本海に面し、秋冬兩季に於いては雨雪の爲めに工事上の不便を感ずること多きも、國防の關係上之を忍びて特に建造するに至りたるものなり²⁾。

という。ここでいう「他工廠」とは、横須賀海軍工廠と呉海軍工廠と佐世保海軍工廠の3者を意味するようである。

その工廠建設を契機として多数の煉瓦造建築物が、国費によって舞鶴の地に新設されていくこととなる。それらの遺構を文化的資源として見つめた研究成果が『京都の赤レンガ 近代化の遺産³⁾』や『建物の見方・しらべ方 近代産業遺産⁴⁾』などの書籍である。前著は京都市を

中心に舞鶴市内，そして宇治市内，さらに福知山，亀岡両市にある京都府内の煉瓦造建造物を掲載している。そのうえ『京都の赤レンガ』という書名であるものの，隣接する滋賀県の実例3物件にも言及している。後著は煉瓦造に限らず全国の工場，倉庫，発電所，交通・通信施設などを網羅している。

歴史的な煉瓦の建物を再利用したり，まちづくりに煉瓦を活かそうという立場から出された文献も少なくない。『赤煉瓦ネットワーク [舞鶴・横浜] 物語⁵⁾』がそれらの代表的なものと言えよう。また地元の遺産をより詳細に調べ記録すると共に，他の地域の同種の資源との共通点や相違点を明示しようとした本も舞鶴で出版されている。『舞鶴の近代化遺産⁶⁾』と『神崎煉瓦ホフマン式輪窯⁷⁾』の2冊である。

舞鶴の煉瓦造建築の保存修理工事に携わる機会に恵まれた建築技術者が，煉瓦建築に関する学位を取得した事例もある。それは『歴史的環境における煉瓦建造物の保存・保全に関する研究⁸⁾』。煉瓦を積み上げた古い建物を煉瓦壁体の姿のままで耐震化する手法を提示している。この学位論文で，舞鶴市役所職員の矢谷明也氏が博士（工学）の称号を母校から授与された。

また舞鶴の煉瓦建造物群がカラー写真入りで全国紙の記事として取り上げられることもあった。その内容が再び1冊の単行本⁹⁾として出版されるほど，いまや“近代化遺産”という概念は一般市民にとっても馴染み深い存在となったようである。

研究の結果

つぎに今日の舞鶴における，煉瓦を活用したまちづくりの発端を生み出した人々について報告する。それは，市民まちづくりグループとでも呼称することが許される「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」の活動実態である。本稿では以下，その活動内容を時間的経過に沿って記述する。彼らの動きは，ふるさと舞鶴に残されてきた歴史的煉瓦造建造物群を将来のまちづくりにおいて積極的にいかすことで，他の都市や地域には見られない個性あふれる景観や人的資源を育て継承しようとする試みであった。それらの活動は各々の本務とは別の，新しい生きがいを見つけた，まさしく生涯学習の実践でもあったようだ。

「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」の発足には下記のような事情があった。昭和60年代に舞鶴市役所若手職員の有志が「まちづくり研究会」を組織する。その分野で先駆的な活動を10年続けていた神奈川県横浜の「横浜市まちづくり研究会」へ，舞鶴の同研究会が赴いた。それは横浜の人々が市の業務とは別の活動として，10年もの長い年月を継続してくることが出来た事情を確認する目的からであった。その訪問において，舞鶴の人々は，横浜のメンバーから最後の見学先として横浜新港埠頭倉庫に案内された。現在“ハマの赤れんが”として有名な「横浜赤レンガ倉庫¹⁰⁾」である。まだ当時，当該建築物は政府が所有していた単なる古い大規模な建造物に過ぎなかった。したがって一般市民にとっては何らの魅力も親近感もない存在であったろう。しかし横浜市側が煉瓦倉庫を自慢する。舞鶴側は何ゆえ煉瓦が誇らしいのか理解できない。実は，



写真-1 NPO赤煉瓦倶楽部・舞鶴の理事会

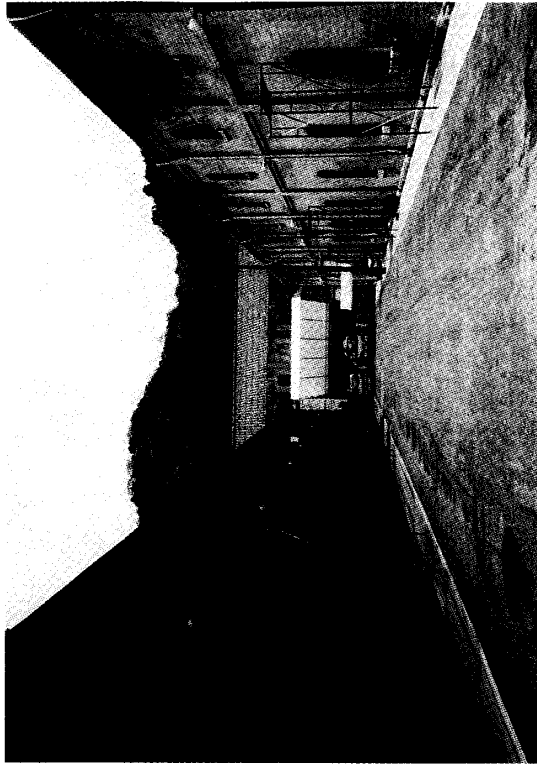


写真-3 赤煉瓦サマーJAZZ in 舞鶴の会場



写真-2 同上 (右端理事長・左手前事務局長)

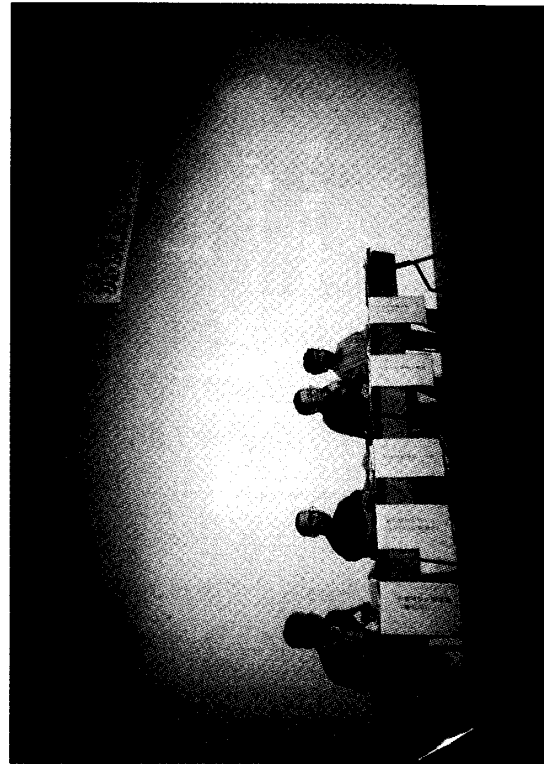
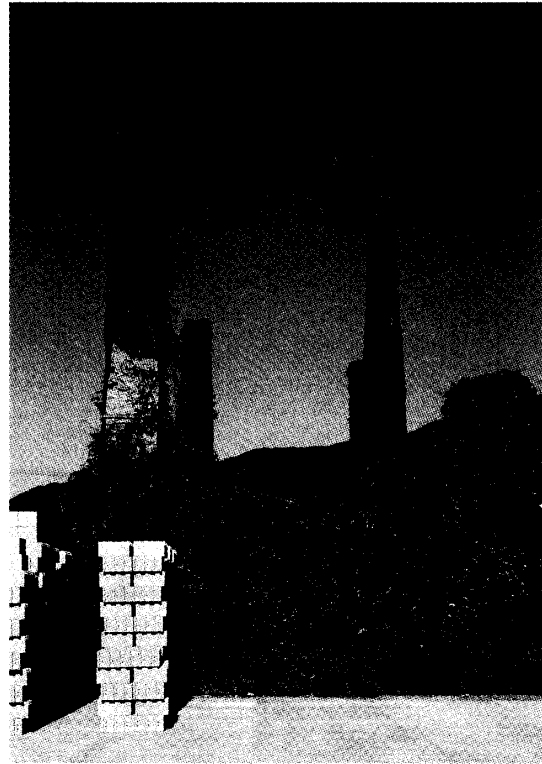


写真-4 赤煉瓦ネットワーク横浜大会で発表



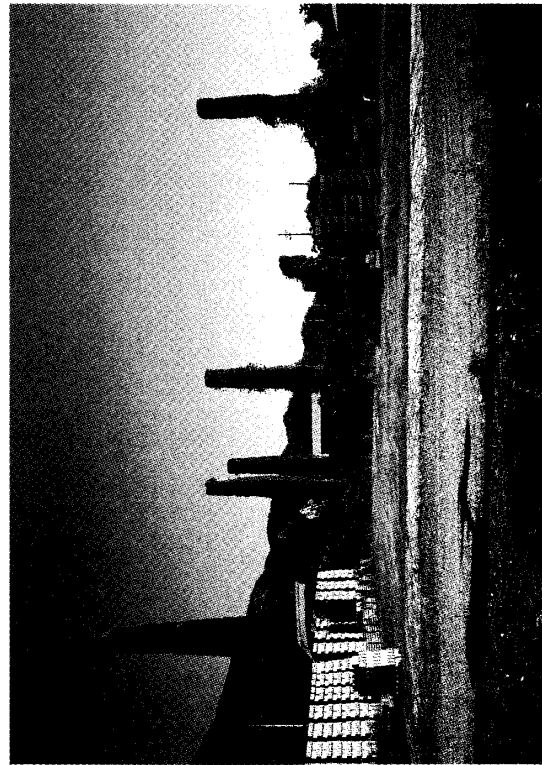
写真一七 同前煙突群を西北西方向からのぞむ



写真一八 旧竹村丹後製窯所ホフマン窯の西面



写真一五 旧竹村丹後製窯所ホフマン窯の南西



写真一六 同上を北側（海岸側）から見た全景

舞鶴にとって古い“煉瓦”は無数に存在した。決して珍しくない。むしろ都市を整備する上では、じゃまな遺物とさえ考えられていた。

その出会いを契機として、帰鶴後に煉瓦探訪を始めた「舞鶴まち研」メンバーの内8名が平成2年4月3日「まいづる建築探偵団」を結成。同年7月7日「横浜まち研」を初めて舞鶴に招き、市内北西部海岸線に残存する神崎のホフマン窯を実測調査した。この窯は明治期にヨーロッパ人技術者の手で、わが国へ導入された新型の煉瓦窯である。日本国内全体でも、もう5基しか残っていない。このホフマン窯については、本学の生涯学習研究所研究紀要『生涯学習研究と実践』第5号の作品部門¹¹⁾に発表されている。

その後、舞鶴と横浜の交流が続き、両者以外で歴史的な煉瓦建造物をいかして新しいまちづくりを進めようとする全国の都市が「赤煉瓦ネットワーク」に集うこととなる。この赤煉瓦ネットワークという組織には、北海道江別市の市役所職員のグループ「江別まちづくりフォーラム」が当初から参加している。このような動きの中で平成3年6月1日、一般市民を含む会員による「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が発足した。

「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」の活動内容には主として3分野各方面での動きがあった。

- ①赤煉瓦の学術的な“発見”
- ②住民への赤煉瓦広報・宣伝
- ③赤煉瓦の利用法提案・実践

上記のうち①は「建築探偵団」の領域を拡大したもので、平成8年度に実施された日本ナショナルトラストによる“舞鶴赤煉瓦建造物群調査”はこの分野を代表する成果といえよう。同調査の結果、舞鶴市内に117物件もの歴史的な赤煉瓦建造物の存在を確認することができた。

②の分野で現在なお重要な課題として残されているのが、前述したホフマン窯である。この窯は旧所有者が土地ごと競売に出していたが、最近になって市内の良き理解者に落札された。それよりも以前から「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」ならびに「神崎地区」の総意はホフマン窯の現地保存を希望していたが、そのような望ましい方向へと好転していく光明が見え始めた。

③赤煉瓦群が構成する都市空間の実践的な利用としては、平成3年8月3日から連続して毎年開催してきたサマー・ジャズがある。これは本年度で13回を終了した。市役所の西側に隣接する倉庫と倉庫の隣棟空間に、野外ステージと客席を設営して毎年夏季の夕暮れ時からジャズ祭を実施するものである。主催団体は「倶楽部」とは別に毎回、実行委員会を組織する。

「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」は平成12年8月9日付で、京都府知事から正式にNPO（非営利特定活動法人）の法人格を承認された。課題は少なくないが今後とも、まちづくり人的センター・実践チームとして活動を続けていこうとしている。

これまでの「NPO 赤煉瓦倶楽部・舞鶴」の歩みを、下記に年表形式でまとめておく。

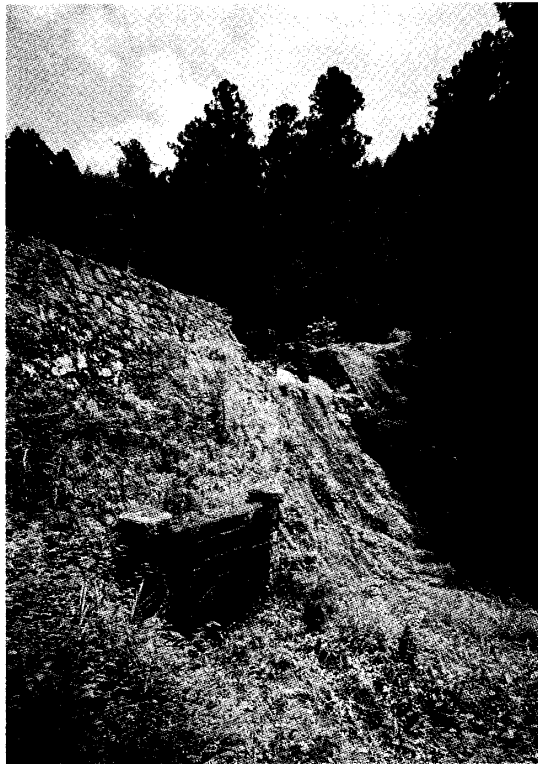
昭和62年8月20日 舞鶴市役所の職員で「舞鶴まちづくり推進調査研究会」が結成される。

昭和62年10月27日 「舞鶴まち研」の第三分科会として『都市の個性化』分科会が設置された。

平成元年3月11日 まちづくり研究会の活動を10年ほど継続していた横浜市へ、舞鶴市の新メ

ンバーが訪問する。舞鶴市側としては“まち研”活動を10年間もの長期間つづけて来たコツを聞き出すつもりであった。横浜市内に残されている建築物などを案内された最後に、横浜新港埠頭倉庫を見せられた。その場面で、横浜市側は自慢気に「ハマには煉瓦の建物がある。誠に貴重だ」と説明。ところが舞鶴側は「煉瓦が何ゆえ珍しく、有り難がるのか」理解できない。なぜならば舞鶴には煉瓦の建物ならば、今なお数え切れないほどあるのだから。この発言に、今度は横浜市側が驚く。舞鶴の人々は帰鶴したのち早速、故郷の煉瓦群を新鮮な目で調査し始めることになる。

- 平成元年12月23日 舞鶴市職員の有志が市役所庁舎東隣の煉瓦造倉庫（市役所所有）をライトアップ。この倉庫建築がリニューアルされて現在の市政記念館となる。
- 平成2年1月18日 後の「まいづる建築探偵団」の母体となる市役所若手職員8名が集いあう。
- 平成2年3月 「横浜まち研」10周年記念パーティーに参加した「舞鶴まち研」メンバーが、舞鶴で発見した多数の煙突をもつ煉瓦窯の写真を持参する。
- 平成2年4月3日 上記のメンバーによって「まいづる建築探偵団」が結成される。
- 平成2年6月23日 舞鶴市内の歴史的建造物の調査を開始。大浦半島の葦谷砲台へ行く。
- 平成2年7月7日 「横浜市まちづくり研究会」のメンバーが、はじめて舞鶴を訪問。新発見された多数の煙突をもつ煉瓦窯がホフマン式の輪環窯であることを確認。
- 平成2年8月4日 京都市で「横浜市まちづくり研究会」と会合を開き、全国的な規模で煉瓦によるまちづくりを続けているグループの連携（今日の赤煉瓦ネットワーク）を企画する。赤煉瓦ネットワーク準備会の発足。
- 平成2年11月25日 舞鶴商工会議所を会場として「第1回赤煉瓦シンポジウム IN まいづる」を開催。舞鶴の赤煉瓦マップである『舞鶴赤煉瓦浪漫』を発行する。
- 平成3年6月1日 「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」発足。倶楽部の事務局は「まいづる建築探偵団」が担当。
- 平成3年6月10日 第1回『サマー・ジャズ・in・舞鶴』を実行するための市民組織「ジャズ祭実行委員会」発足。ジャズ祭は市民の手により本年度まで毎年実施。
- 平成3年8月1日 煉瓦の写真集兼調査書籍『舞鶴の赤煉瓦』を発行する。
- 平成3年8月3日 『91サマー・ジャズ・in・舞鶴』として山下洋輔コンサートを開催する。
- 平成3年10月12日 「赤煉瓦ネットワーク」設立。設立総会・火入れ式を横浜で開催。全国から約100名の会員が集まる。以後、事務局を神奈川県横浜市に置く。
- 平成4年10月31日 横浜において第2回「赤煉瓦ネットワーク」シンポジウム・総会を開催。
- 平成5年11月6日 舞鶴市役所の南側（京都府舞鶴市浜2011）に、鉄骨煉瓦造の旧魚型水雷庫を再利用して『舞鶴市立赤れんが博物館』がオープン。
- 平成5年11月13日 第3回「赤煉瓦ネットワーク舞鶴総会」を開催する。
- 平成6年11月26日 第4回「赤煉瓦ネットワーク江別大会総会」が道内で開催され参加する。



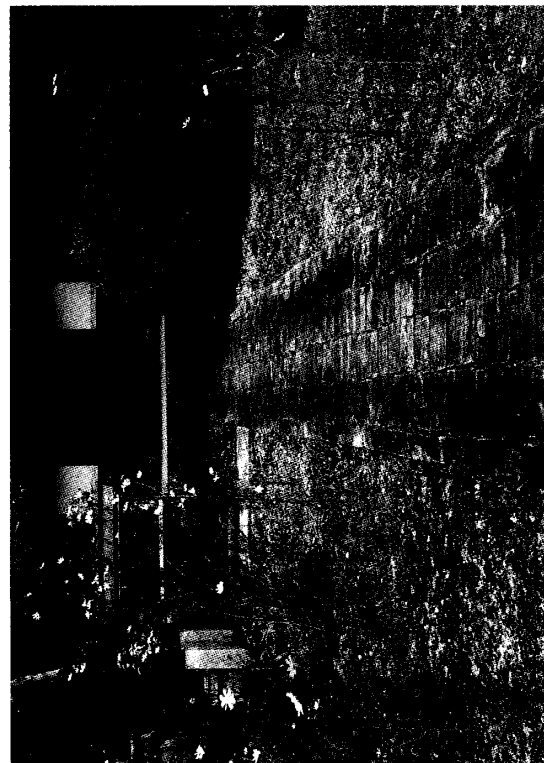
写真一11 舞鶴市内の創設水道・与保呂水源地



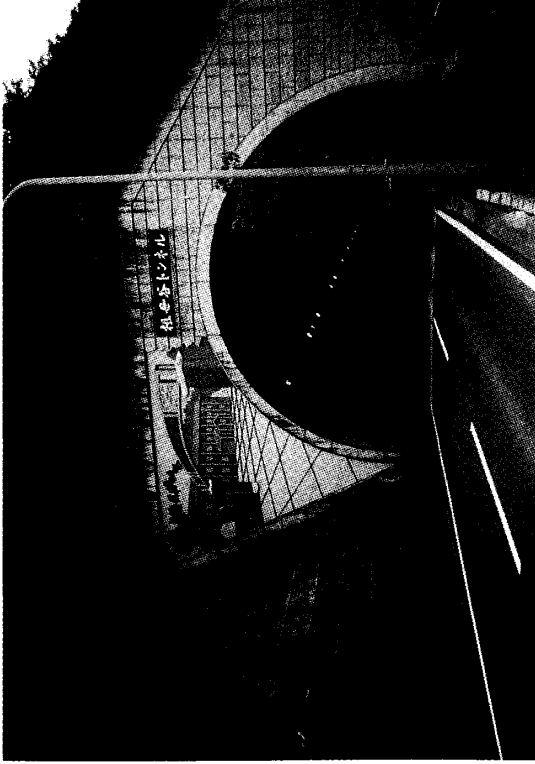
写真一12 旧北吸浄水場第2配水地煉瓦造上屋



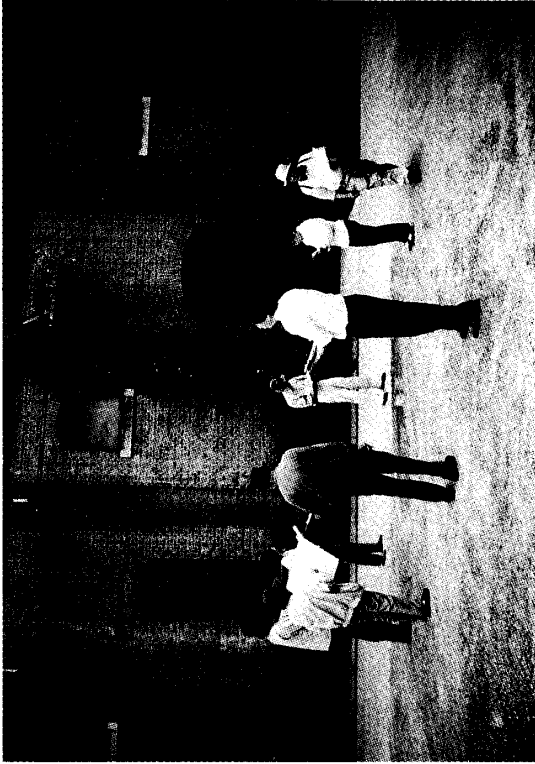
写真一9 神崎の湊十二社に残る煉瓦造手洗所



写真一10 西舞鶴の円隆寺に寄進された煉化石



写真一13 舞鶴東IC西方面の祖母谷トンネル



写真一15 舞鶴倉庫前での赤れんががカルテ記入



写真一14 舞鶴市立赤れんが博物館友の会風景



写真一16 赤れんがが博物館妻面の刻印煉瓦確認

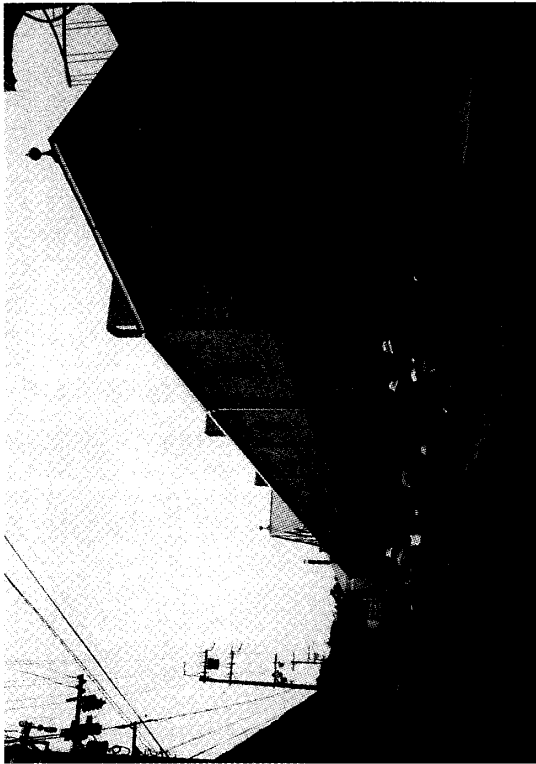


写真-17 友の会による舞鶴市政記念館の実測



写真-18 市政記念館内部1階ホール実測作業

平成7年1月17日 阪神淡路大震災発生。神戸の煉瓦活用事例を前年6月4日にグループで見学していた。

平成7年10月15日 市役所所有の煉瓦造倉庫を改装し『舞鶴市政記念館』としてオープン。

平成12年8月9日 「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が京都府知事から正式にNPOの法人格を承認される。現在、当NPOにとって最大の関心事は、舞鶴市西神崎の旧ホフマン窯の保存と活用方法である。

つぎに本年度から発足した「舞鶴市立赤れんが博物館友の会」について記述する。当「友の会」の活動内容には、次のような4項目が掲げられている。

- ①企画展への協力
- ②館内ガイドボランティア
- ③「ミニれんが作り」の受付，指導，助手
- ④調査・研究活動

これらのうち①企画展への協力，とは赤れんが博物館で開催される企画展の内容に協力できるよう日頃から準備することである。同博物館における企画展は，例年10月から11月にかけての時期に設定されている。

次の②ガイドのボランティアは，赤れんが博物館の建物や展示品について来館者を案内する

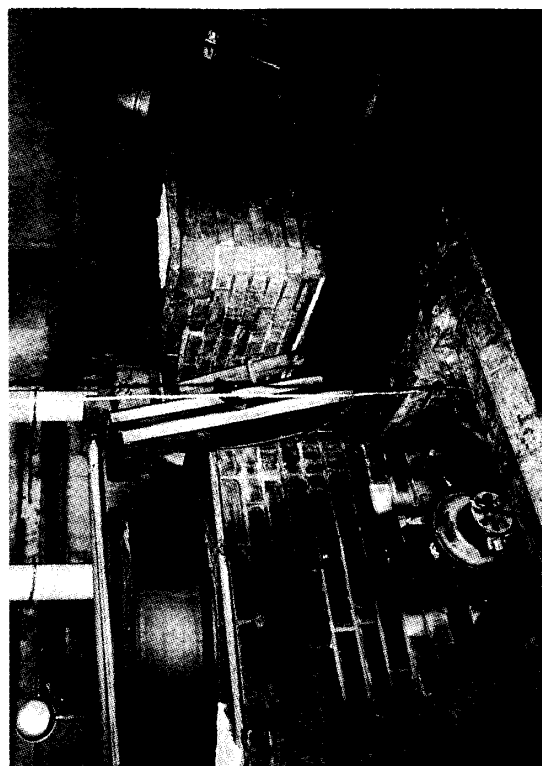


写真-21 黒谷での和紙制作において現役の窯



写真-22 友の会会員らの鉄道工事逝去者墓参



写真-19 見学会のため赤れんが博物館へ集合

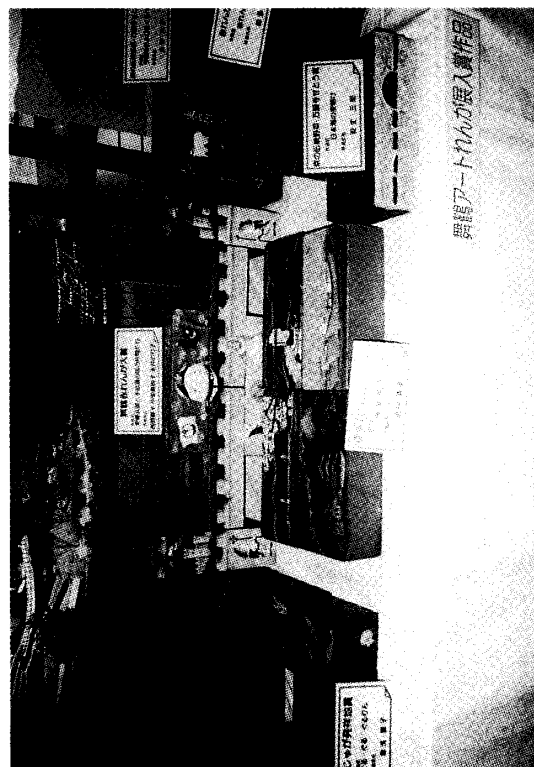


写真-20 「舞鶴アートれんが展」の入賞作品



写真-23 赤れんが博物館の開館10周年記念展

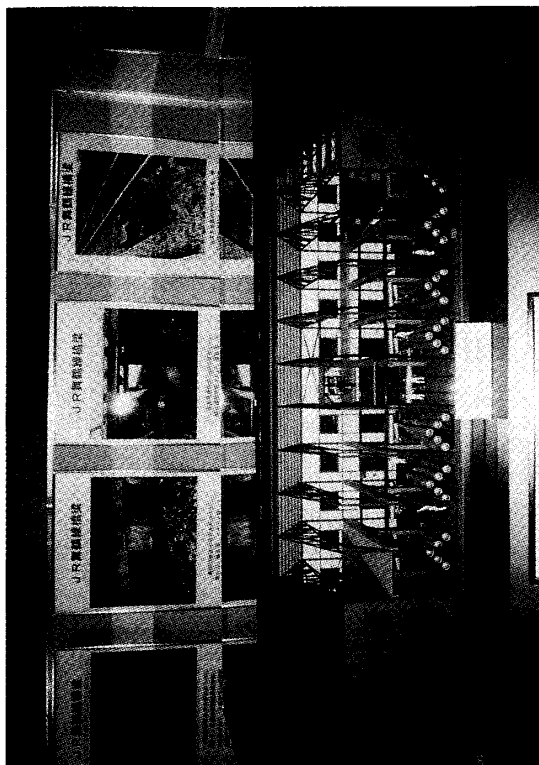


写真-25 赤れんが博物館2階の同博物館模型



写真-24 同上「舞鶴のれんがと建築」の会場



写真-26 市内小学生の作「赤れんが探検地図」

行為である。同博物館は関西地方の観光地の一面に所在しているため、とくに秋の行楽シーズンには多数の来館者を迎えることになる。

③「ミニれんが作り」とは、舞鶴市で毎年10月の第2土曜日と翌日の日曜日に実施している「赤れんがフェスタ」の2日間に行っている催し物である。土を四角く成形した小サイズの煉瓦素地に、文字や図案など自由な造形をするもの。作成者から預かって乾燥・焼成し、後日に当人へ届ける。

④の調査・研究活動は市内外に現存する煉瓦造遺構の実測や文献研究などをして、その結果を①や②にフィードバックしようとするものである。

実は「友の会」発足に際しては、昨年以前から準備期間が設けられていた。学習時間を設定していたのである。室内における勉強会だけでなく、市内の煉瓦造建造物をも見て歩いた。それらに加えて舞鶴から自動車で東方向へ約1時間ほどの距離にある福井県小浜市への見学会も実施した。これらの学習会・見学会・調査行為等を含む準備期間は、ミュージアム・カレッジ（博物館定期講座）と称して実施されていた。

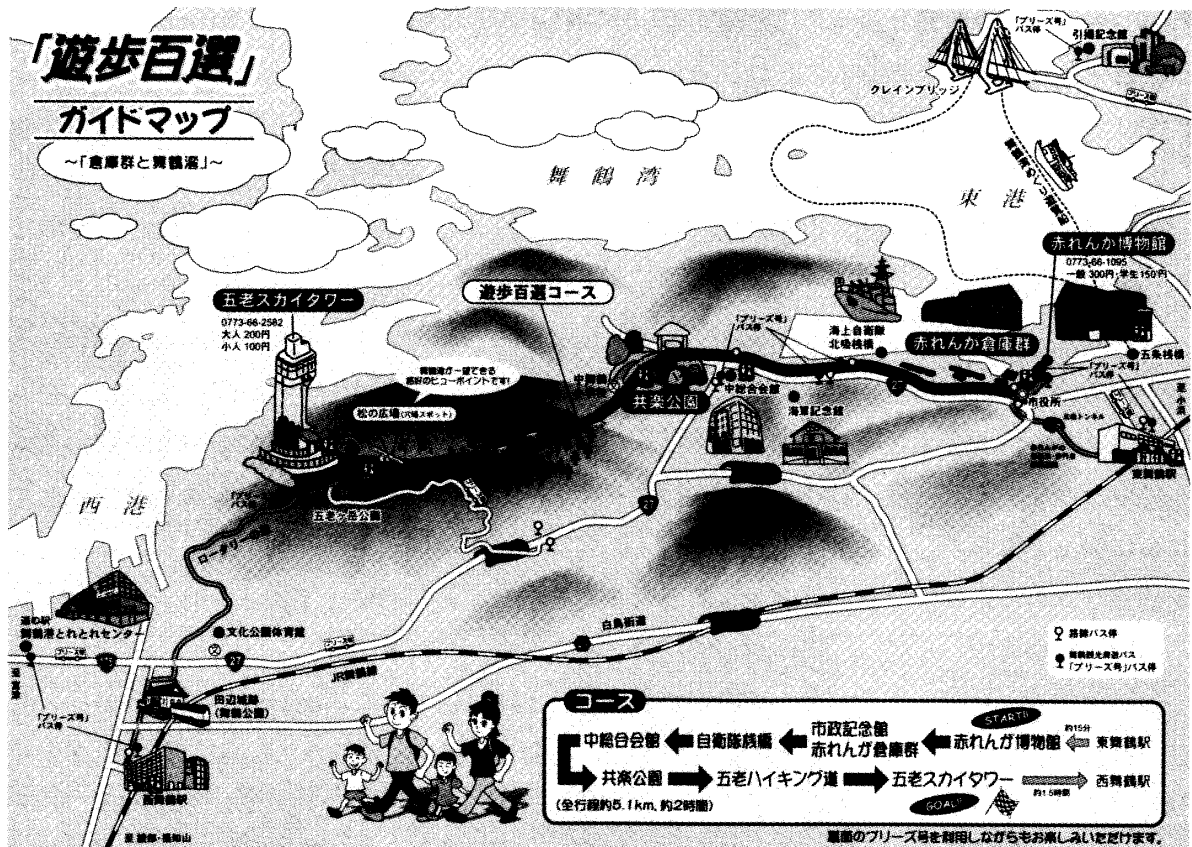
同会が正式に発足した月日は、平成15年5月24日土曜日であった。当日は午前10時から、舞鶴市総合文化会館の会議室で発会式が行われた。発会式当日に配付された資料には「(仮称)赤れんが博物館ボランティアの会」という文言が記されていた。その会の次第は1.挨拶の後に、2.アンケート調査の結果が発表された。このアンケート調査とは、ミュージアム・カレッジ受講者へ事前に提示されていた「赤れんが博物館ボランティアの会」に入会した場合、自身が参加活動したいと考えている具体的な内容のことである。

①調査・研究活動 ②企画展への協力 ③館内ガイドボランティア ④『学校出前講座』講師または助言者 ⑤『ミニれんが作り』の受付、指導、助手 ⑥各種イベントの企画、参加、協力 ⑦『赤れんが博物館だより』発行の協力 ⑧アンケート『旅人の声』に対する返事の手紙書き ⑨赤れんが博物館周辺の施設管理、という9項目であった。なお、このアンケートに対しては上記のほか18点ほどの意見や要望が自由に寄せられた。

そして発会式当日の最後は、3.今後の活動 次回の会合の日程と活動内容の打ち合わせ、をしたことであった。

現在「舞鶴市立赤れんが博物館友の会」会員の総数は、20名余りである。会員の互選によって会長、副会長、会計が1名ずつ選出されて活動を続けている。同「友の会」の運営方法については『「舞鶴市立赤れんが博物館友の会」規約』を遵守しながら進めているところである。そして当面の事務局は舞鶴市立赤れんが博物館が、その任に当たっている。

舞鶴市立赤れんが博物館友の会は、まだ発足したばかりの若いグループである。今後の課題や将来への展望には、多くの未知数がある。しかしながら会員の共通項として、いくつかの点を列挙しておくことも可能である。第1点は会員各人が生涯学習の理念を、すでに体験として強く感じていることである。ボランティア活動として来館者に博物館や舞鶴の煉瓦建築の案内を経験した結果からであろう。他者に説明を試みるという行為は、自らを向上させるという姿



図－1 港町浪漫「遊歩百選」ガイドマップ

勢と不可分なのである。この過程は体験者には痛感できるものの、未経験者には縁遠い世界の出来事であろう。

友の会会員全員に共通している2点目は、「ふるさと舞鶴への深い愛情と誇り」である。この“無償の愛”は、単に営利行為（ビジネス）・業務（ジョブ）だけからでは生まれない。自らの生き立ち、生活基盤・郷土への感謝の念から沸いてくるものである。したがって地域社会と次世代への責任感も生まれるくる。言い換えれば「功なり名を遂げた人生の達人」の領域とも言えそうである。しかし年齢層の問題だけではなく、生涯の仕事（ライフ・ワーク）の設定と遂行こそが、生涯学習そのものなのである。

なお紙面の関係で舞鶴市内における大学の活動、文化財保護など詳述することが出来なかった点も多い。ほんの僅かながら、前者は『広報まいづる』の「舞鶴宝もの大学都市構想¹²⁾」、後者は同じく『広報まいづる』の「国の重要文化財に指定¹³⁾」などを参考として、今後のまちづくりへの指針提案に代えたい。

舞鶴市は京都府内に位置するという立地条件の良さをいかして、数年前から京都市都心にある複数の大学と積極的な交流をはかってきている。舞鶴市民が正規の大学院へ入学して研究生生活を開始している事例、あるいは大学教授による市民への各種講座の開講、京都の大学生による舞鶴のまちづくり研究活動、大学研究者の舞鶴市政への助言・参加など多くの事例を挙げることができる。それから舞鶴市では、市外の大学の各研究室の教授陣と学生諸賢がチームを組

んで、同市を訪れる際に便宜をはかっている。宿舍の提供などである。オープン・カレッジと呼ばれている

このたび国の重要文化財に指定された煉瓦造の遺構は、旧海軍の上水道関連施設である。これらの一部を、写真-11舞鶴市内の創設水道・与保呂水源地と、同12の旧北吸浄水場第2配水地煉瓦造上屋として掲載する。

最後に江別市との比較をまとめておきたい。残り紙数の余裕がないが、本研究で触れた多岐にわたる項目は、舞鶴市のみに関わる事からではない。全国いや世界中のまちづくりに共通する視点だと考えられる。したがって北海道江別市における将来のまちづくりの場面でも、十分に参考となろう。また、煉瓦を活かした都市景観の創出に関しては、平成16年10月16日（土）野幌公民館での開催予定「赤煉瓦ネットワーク全国大会」での、宇宙飛行士・毛利衛氏による基調講演「私と第二のふるさと江別と煉瓦（仮題）」が大きな示唆に富むものと期待される。歴史的な煉瓦建築を活用したまちづくりという次号以降一連の当研究の成果に待ちたい。

む す び

以上に述べてきた通り、舞鶴市の市民活動は活発化している。同市が固有するさまざまな資源を活かした特色あるまちづくりが進められている。その成果の一例が、図-1に示すまち歩きのご案内図である。

「遊歩百選」とは？ 日本を代表する観光地から「自然と歴史を再発見する旅」の楽しめる地域百ヶ所を選んで顕彰するもので、読売新聞が主催しています。／「健康」・「環境」・「観光」の<3つのK>をキーワードに健康増進に役立つ“歩くこと”を主体とし、同時に市民の継続的、積極的参加による地域の活性化をめざすものです。

という記述は、生涯学習社会の構築・推進と健康生活の増進など、本研究や本学が目的とするところに合致する部分が大いだと判断される。

最後に今後「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」と「舞鶴市立赤れんが博物館友の会」が解決すべき課題を示唆する事で、むすびにかえたい。両者とも会員数を恣意的に増やす必要は、おそらくないであろうと考える。むしろ会員数が必要だという理由があるとなれば、それは保存活動・まちづくり活動をする際に最も有力な頼りとなる賛同者・理解者の和の力が大きくなるという利点であろう。それに加えて会員数が多いことの強みは、さまざまな催し物・イベントを企画し実施する場合に、大きなマン・パワーが発揮される点である。したがって課題は2つ残される。

- ①煉瓦の再利用こそが、舞鶴固有のまちづくりに繋がるという信条を、市民に正しく伝える
- ②従来つづけてきた催し物・コンサート以外の企画も考え、実施する事で、市民へのアピール継続という課題を解決に導く

このような積み上げこそが、生涯学習社会構築へのささやかな努力の一例だと考える。

謝 辞

本稿を執筆するに際して、実に多くの関係者から非常に大きな御教示・御協力・御理解などを頂戴した。また本研究を進めるにあたっては、平成15年度北海道浅井学園大学特別研究費（共同研究）の採択を受けた。末尾になってしまったが、この紙面を拝借して心からの謝意を表する次第である。

注

- 1) 『舞鶴の赤煉瓦 1889▶1991』まいづる建築探偵団，まいづる建築探偵団，1991年8月3日，P-62
- 2) 『明治工業史 造船篇』工學會・啓明會，工學會・啓明會，大正14年9月5日，P-293
- 3) 『京都の赤レンガ 近代化の遺産』日向進・前久夫編，京都新聞社，1997年8月10日
- 4) 『建物の見方・しらべ方 近代産業遺産』日本産業遺産研究会+文化庁歴史的建造物調査研究会，ぎょうせい，1998年7月30日，PP.158-159
- 5) 『赤煉瓦ネットワーク [舞鶴・横浜] 物語』馬場英男・内藤恒平・仲原生ほか，公職研，2000（平成12）年3月30日
- 6) 『舞鶴の近代化遺産』舞鶴市教育委員会社会教育課，舞鶴市・舞鶴市教育委員会，平成13年3月
- 7) 『神崎煉瓦ホフマン式輪窯』赤煉瓦倶楽部舞鶴，赤煉瓦倶楽部舞鶴，2003年3月
- 8) 『芝浦工業大学博士学位論文 歴史的環境における煉瓦建造物の保存・保全に関する研究』矢谷明也，私家版，平成10年9月
- 9) 「100年刻んだ壁の温もり 舞鶴市 旧海軍赤レンガ倉庫群」文・山内則史，写真・玉木雄介。『近代化遺産 ろまん紀行 西日本編』読売新聞文化部，中央公論新社，2003年9月10日，PP.106-109
- 10) 『地域づくり三月号（通巻129号） 特集：近代化遺産が息づくまちづくり』地域活性化センター，地域活性化センター，平成12年3月1日，P-25
- 11) 「続・煉瓦の現場」水野信太郎。『北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要 生涯学習研究と実践 第5号』北海道浅井学園大学生涯学習研究所，北海道浅井学園大学生涯学習研究所，2003年11月30日，PP.21-28
- 12) 「舞鶴宝もの大学都市構想」。『広報まいづる No.698』舞鶴市秘書課広報広聴係，舞鶴市，平成15年（2003）11月16日
- 13) 「国の重要文化財に指定 旧海軍の水道施設と行永家の蔵 市内の文化財140件に」。『広報まいづる No.697』舞鶴市秘書課広報広聴係，舞鶴市，平成15年（2003）11月1日